

天理図書館（以下、本館）は、蔵書数の多さと質・量ともに優れた古典籍資料を所蔵する図書館として知られている。

蔵書数について述べると、天理大学は、「AERA MOOK 進学『大学ランキング 2021』」（朝日新聞出版）の大学図書館ランキングの総合評価で第1位を獲得した。これは、奉仕対象学生1人あたりの「蔵書冊数」、「受け入れ図書冊数」、「貸し出し数（学生）」、「図書館費」の4項目についてそれぞれの最高値を100として指数化した上で、その合計を比較した結果である。天理大学は、学生数3,000人規模の大学であるが、蔵書冊数は、付属施設となっている本館と情報ライブラリーの合計で210万冊以上になる。それは、調査対象大学727校中26番目の多さであり、1人あたりの蔵書数に換算すれば、最高値の指数となる。また、本館単体の蔵書数（150万冊）以上を所蔵する大学は40校しかない。

次に、質・量ともに優れた古典籍資料を所蔵しているという点について述べる。少し古い話だが、本館の創設者である中山正善2代真柱と昵懇の間柄であった古書店主反町茂雄は、1972年の講演会で、「天理は日本一の図書館である。しかもぜひぬけて学術的価値の高い図書館である」と評した<sup>(1)</sup>。反町が価値を計る指標としたのは、次のようなものである。

まず、比較対象として、全国の大きな図書館や名高い図書館、特殊なコレクションを持つ図書館や文庫あるいは個人の収集家によるコレクションをとりあげる。具体的には、国立国会図書館、東京大学図書館、東洋文庫、大東急記念文庫、宮内庁書陵部など約30カ所である。次に、奈良時代の古事記・日本書紀、平安時代の源氏物語・古今和歌集、鎌倉時代の平家物語というふうな、日本の各時代の主要な古典籍を20点選び、それらについて本館所蔵のものと比較する。加えて、五山版や古活字版といった重要な古典籍のジャンルごとに比較した。最後に、国宝や重要文化財といった国の指定文化財の数量をあげた上で、「日本一の図書館」と結論づけた<sup>(2)</sup>。

ここで誤解のないように記しておきたい。筆者は、資料の多寡もさることながら、どのようにに活用しているかも大事だと考える。また、反町は評価の指標の1つとして国の指定文化財をとりあげているが、本館はそれらを意図的に収集しているわけではない。むしろ、「書物を集める際の基本的態度の一つとして、書画骨董に類するものはすべて拒否する姿勢をかたくななまでに守りつづけてきた<sup>(3)</sup>」のであり、本館所蔵の指定文化財の多くは、本館が収蔵した後に、その資料が有する価値を認められ、結果として文化財指定にいたっている<sup>(4)</sup>。本年（2025年）も3月21日の文化審議会において、館蔵『参宮人帳・御祓賦帳（橋村肥前大夫家伝来）』を重要文化財に指定することが答申された。換言すれば、指定を受けるまでには、貴重な図書資料を整理・目録化した上で、研究者をはじめ閲覧に供し、時宜に応じて影印本の出版や展覧会の開催等によって広く公開活用してきた事実がある。この点こそ評価されるべき点ではないか。

ところで、国の文化財に指定されると、修理等に対する国庫補助を受けられたり、保存及び活用のために必要な各種の措置

が講じられたりする。たとえば、重要文化財の場合、修理等にかかる経費の50パーセントが補助される。加えて、総事業費、事業の施行年度数、事業者の財政規模から割り出される「事業規模指数」に基づいて加算率が定められており、最大で85パーセントが補助されることもある<sup>(5)</sup>。しかし、文化財指定を受けるということは、こうした経済的支援を得られるだけではない。文化財を後世にまで守り伝えていく役目を付託されることでもある。筆者は、本館が1世紀近くに渡りその付託に答えてきたことによって、天理大学のみならず天理教が社会的信用を培ってきたことにこそ意義があると思う。

なお、指定文化財は現状変更等に一定の制限が課される。売買の際に国への申し立てが必要になり、輸出も禁止される。また、登録有形文化財については、所有者の都合による登録の抹消が散見されるのに対して、国宝又は重要文化財の指定が解除された例を筆者は寡聞にして知らない。

閑話休題。反町が指標としたのは主に和書である。本年も、前述の重要文化財指定への答申をはじめ、夏目漱石自筆原稿『吾輩は猫である』が公開され、『古今和歌集両序』が藤原俊成自筆と学会で発表されるなど、国文学資料が脚光を浴びている。しかし、発足当時は、海外布教に従事する人材を育成する目的で設立された天理外国語学校の生徒を対象とする海外布教のための参考図書館として構想されており、「カトリックの人達の移民と布教の記録」や「外国人の東洋研究の文献」の収集が念頭に置かれていた<sup>(6)</sup>。

洋書は今でも本館資料のおよそ4分の1を占め、和書と同様に極めて文化的・学術的価値の高いものも含まれる。一例をあげると、反町が前出の講演会で言及した唯一の洋書、インキュナブラがある。15世紀半ばにグーテンベルクによって発明された印刷術によって印行されたいわゆる「揺籃期本」である。反町はインキュナブラについても「日本一」と評した<sup>(7)</sup>。雪嶋宏一の『本邦所在インキュナブラ目録第2版』（2004年、雄松堂）によれば、日本国内では62の図書館が所蔵しており、総数で466点になる。そのうち、明星大学56点、天理大学56点、慶應義塾大学53点で、この3校で全体の3割以上を占める。同書の刊行以来20年経つが、国内有数のコレクションであることに変わりない<sup>(8)</sup>。

[註]

- (1) 反町茂雄「天理図書館の学術的価値」『ビブリア』52号、312頁。
- (2) 前掲書、265～312頁。
- (3) 天理図書館編『天理図書館四十年史』（1975年）、362頁。
- (4) 天理図書館編『天理図書館稀観書図録』（2006年）序。
- (5) 文化庁『重要文化財（建造物・美術工芸品）修理、防災、公開活用事業費国庫補助要項』（2025年最終改正）。
- (6) 「天理図書館二十五周年の回顧と将来を語る（座談会）」『ビブリア』5号、2～16頁。
- (7) 前掲『ビブリア』52号、307頁。
- (8) British Library “Incunabula Short Title Catalogue”（web版）で検索しても、ほぼ同様の結果となる（2025年9月閲覧）。